

後白河法皇

後白河法皇と法然との関係を見ると、『伝法絵』などでは法然が後白河法皇に召されて説戒し、また『往生要集』を講じた時、法皇は信仰のあまり、右京権大夫藤原隆信に命じて、法然の真影を写し、蓮華王院の宝蔵に納めしめたことを記すのであるが、『四十八巻伝』は、この他に、法皇が仙洞で如法經供養をした時、法然をもって先達としたこと、また法皇が病臥した際、法然から受戒したのみならず、臨終の善知識に法然が侍したことをも記している。

後白河法皇が源信の『往生要集』の談義を聴いたことは、『玉葉』文治3年4月条の記事によっても知られる。すなわち、

(法皇)近日、往生要集の談義あり、澄憲法印己下5人の学生、其の事に預る。
云々

とあるように、澄憲(聖覚の父)が中心となって談義が行われている。ただし兼実は、右の記事に続いて、「法皇、年来、曾て法文の行方を知らず、況や義理論議に於いておや。而して比の卸悩の時に臨み、忽然として此の議あり、奇と為すに足る。是れ又物狂か」と書いている。

また法然が、先達となって行われた如法經供養の記事も、『玉葉』に記された文治4年8月の、仙洞における如法經修行の記載によって巧みに造作されている。この場合、『玉葉』の記事の欠けたところ、または比較的その記事の薄手のところを選んで、『四十八巻伝』は如法經供養の月日を明記している。とにかく、法然が後白河法皇に『往生要集』を講説したり、あるいは仙洞における如法經供養の先達を勤めたことを立証する確実な史料はない。

法然が後白河法皇の臨終の善知識に召されたことについて、『四十八巻伝』に、

後白河法皇最後の御時、聖人を御善知識に召されて、まいり給ける。

と記し、また法然の弟子の聖光房弁長の『末代念仏授手印』にも、

(法然は)後白河法皇の御臨終の時、御善知識に召さる。

と特筆している。しかし建久3年(1192)3月に、六条西の洞院宮で崩じた後白河法皇の臨終には、善知識として、大原の本成房湛敷(たんきょう)、仁和守宮の勝賢が侍していた。

「十念具足、臨終正念、西方に面向し、手に定印を結ぶ、決走往生、更に疑はず。」と言われたが、しかし、ここに法然の姿を見出すことはできない。のみならず、後白河法皇死去の前年、すなわち建久2年9月に、九条兼実の招請により、宜秋門院に授戒するため、法然が宮中に参入したところ、

「先例、此の如きの聖人、強ち(あながち)に貴所に参ぜざるの由、傾ける輩が有」った事實は、およそ法然と高倉・後白河・後鳥羽などの宮廷との結縁関係の説話を否定するのである。法然は終生、僧位・僧官を持たず、「上人」(念仏聖)といわれる身分の僧に過ぎなかった。にもかかわらず、法然の伝記で、法然と宮廷との師檀関係が設定されてくるのは何故であろうか。

慈円は、法然が「あまり方人(かとうど、味方)なく」て生涯を閉じたことを記している。このことは、上流貴族層に法然の支持者が少なかったことを意味するのであるが、親鸞・日蓮などの鎌倉新仏教の唱導者と同様、法然も当時の上層階級からは孤立の状態にあった。法然の在世・滅後にまたがる激しい専修念仏弾圧も、法然を含む専修念仏者が、上層階級と遊離していたことにも原因を持つが、このことは逆に、法然滅後の専修念仏者が宮廷を含む上層階級に接近し、専修念仏教団としての公認を求める運動に結びつく。宮廷のみならず、貴族や南都・北嶺の聖道門教団の有力な僧をも、専修念仏の帰依者とすることにより、法然滅後の専修念仏教団の地位の確立を計ったのである。

『四十八巻伝』が、九条兼実の他に花山(かざん)院藤原兼雅、野宮(ののみや)左大臣藤原公継、民部卿藤原長房などの貴族を登場せしめ、専修念仏の帰依者として描いているのは、畢竟、宮廷や上層貴族に接近することにより、専修念仏教団の公認を促進するためであったと解されよう。

後白河法皇と後鳥羽上皇が共に浄土教に帰依していたことは明らかである。

後白河法皇の場合、前に引用した臨終の様子がこのことを示しているし、また後鳥羽上皇は隠岐の行宮(あんぐう)において、弘法大師筆の浄土三部経、および定朝作阿弥陀三尊像を所持し、その厨子には『観無量寿経』の文が麗筆で書かれていた。

なお後鳥羽上皇の製作にかかる「無常講式」には、安楽国に往生することが願われている。宮廷の浄土教は、もちろん法然の専修念仏ではなく、源信に発する天台の浄土教であったが、とにかく上層社会の浄土教受容者を拡大し、後白河法皇や後鳥羽上皇をはじめ、公家の人々を専修念仏の帰依者または外護者とする事により、専修念仏教団にとって有利な地歩を確保しようとしたのであろう。

従って、『四十八巻伝』などの法然の伝記に描かれる上層階級と専修念仏との親近性は、法然在世中の事実を示すのではなく、これらの法然の伝記が作られた頃の念仏教団の事情を反映するのである。

法然の専修念仏の直接の帰依者は、建堂造仏の資力がなく、読誦經典の知識もなく、貴族からは蔑視せられた下賤無智の在家者であった。(田村圓澄)